

教育研究業績書

2023年05月08日

所属：英語グローバル学科

資格：教授

氏名：佐々木 顕彦

研究分野	研究内容のキーワード	
外国語教育学	英語教授法、英語学習法 CALL (Computer-Assisted Language Learning) Language Learning Strategies	
学位	最終学歴	
博士 (外国語教育学), MA in TESOL, 修士 (教育学), 学士 (法学)	関西大学大学院外国語教育学研究科	
教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. ICTを活用した授業の展開	2016年4月～現在	パワーポイントを利用し、視聴覚教材を積極的に利用する授業を展開。また、科目目的に合わせて、ICTを使った反転授業もおこなっている。さらに、すべての授業で Google Classroom を活用し、授業連絡や質問受け付け、フィードバック提供、課題のやり取りなどをおこない、個々の学生のニーズに合わせた指導をおこなっている。
2. 言語形式への意識を高めるライティング活動の導入	2017年4月～2021年3月	授業アンケートで得られた英文法に不安を覚える学生の声をもとに、言語形式への意識 (metalinguistic awareness) を高める (noticing) ライティング活動を授業の帯時間に導入。英文法を演繹的に想起し使用する活動を通して、学生の英文法に対する苦手意識を軽減する試みをおこなった。
2 作成した教科書、教材		
1. Talk with Our Planet -Intensive Reading 「地球の今-私たちのこれからのために」	2008年4月	英国 Harcourt International Education Group刊行の“Planet under Pressure”を日本人大学生向けに改訂した英語教科書。各章は、貧困や汚染といった世界の問題を扱った平均約540語の英文で構成されており、脚注や巻末の語彙文法解説、単語学習用の「重要単語リスト」を掲載し、学習者が語彙習得を通して精読力を高めることを目的とする。 (発行所) 松柏社 (編著) 竹内 理、池田真生子、佐々木顕彦
2. Tapestry Reading 3 [Intermediate] 方略で学ぶアクティブ・リーディング3	2010年4月	Rebecca Oxford博士が編集したTAPESTRY Readingシリーズを日本人大学生向けに改訂した英語教科書。全4巻中 (4レベル) の第3巻 (Intermediate)。各ユニットで効果的な Reading strategy を学びながら英文を読み、読解力を高めるとともに、語彙力をつけることを目的とする。 (発行所) 松柏社 (監修) 竹内 理 (編著) 佐々木顕彦、田村朋子
3. A Good Read: Developing Strategies for Effective Reading-Book 1 [Japan Edition]	2017年4月	同名の英語版に基づいた大学生用英語リーディング教材。TOEIC 350-450点レベルの学習者を対象としており、様々な読解ストラテジーを学ぶとともにチャンク (i. e., 2-8単語の英語独特の決まり文句) が習得できるよう構成されている。また、本書ではリーディング内容をスピーキングやライティングの活動に用いることにより、4技能の統合や英語での表現や発信につなげる学習を可能にしている。 (発行所) 松柏社 (監修) 竹内 理 (編著) 佐々木顕彦
4. A Good Read: Developing Strategies for Effective Reading-Book 3 [Japan Edition]	2018年4月	同名の英語版に基づいた大学生用英語リーディング教材。TOEIC 550-650 点レベルの学習者を対象としており、様々な読解ストラテジーを学ぶとともにチャンク (i. e., 2-8単語の英語独特の決まり文句) が習得できるよう構成されている。また、本書では、シリーズ前半 (Book 1 & 2) で用いた「リーディング内容をスピーキングやライティングの活動に用いる4技能の統

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
2 作成した教科書、教材		
5. 文部科学省検定教科書:New Crown-English Series-Book 1-3	2020年4月	合タスク」を引き継ぎ、さらに高いレベルのタスクを盛り込んでいる。 (発行所) 松柏社 (監修) 竹内 理 (編著) 佐々木顕彦、山岡浩一 本書は、2021年度(令和3年度)改訂版の中学校向け文部科学省検定英語教科書である。2017年から著作者として本書制作に携わり、主にBook 2(2年生用)の本文執筆と校正、文法項目選定と配列、教師用マニュアル執筆と校正、教授支援資料の作成や校正などをおこなった。
6. Integrity: Vitalize your English studies with authentic videos (Beginner)	2023年1月20日	(発行所) 三省堂 (著作者) 根岸雅史、日臺滋之、松沢伸二、竹内 理 今井裕之、酒井英樹、... 佐々木顕彦 イギリスのメディア The Guardian の独自目線で作られた映像を足がかりに、4技能の様々なタスクを提供し、大学生の英語での情報整理・発信といったスキルを養うことを目的とした教科書。全3冊のシリーズの初級レベルで、TOEIC 300-400 点レベルの学習者を対象としている。 (発行所) 金星堂 (監修) 竹内 理 (編著) 佐々木顕彦、川光大介
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 英語学習支援	2016年4月～2020年3月	英文科「英語学習相談室」の advisor として、全学の希望学生を対象に、効果的な英語学習法の指導やTOEIC・大学編入試験対策などを支援した。
2. 英文科幹事会指導	2016年4月～2017年3月	英文科学生委員として英文科幹事会を指導。英文科幹事懇談会や卒業パーティー等の実施を支援した。
3. 教職課程(中高英語)履修者支援	2016年4月1日～現在	中高英語教職課程を履修する学生に対し、教育実習の教案作成や授業実践を指導している。また、大学4年生の教員採用試験受験者に対する支援(筆記試験指導、面接指導、模擬授業指導など)もおこなっている。
4. 附属高等学校3年生 英文科入学前講義	2017年2月24日	2017年度に英文科ならびに英語キャリアコミュニケーション学科へ入学予定の武庫川女子大学附属高等学校3年生を対象に、英語の4スキルを向上する学習法についての講義と演習をおこなった。
5. 担任(学年主任)業務	2017年4月～2019年3月	2017年度大英入学生 A組担任の業務、ならびに学年主任として初期演習や丹嶺研修、MFWI 留学に関する統括業務をおこなった。
6. オープン・キャンパス「ミニ講義」担当	2017年8月11日	2017年度オープンキャンパスにおいて、英文科「ミニ講義」を担当。「効果的な英語学習法」について講義をおこなった。
7. 附属高等学校SE対象大学講座	2018年11月13日	武庫川女子大学附属高等学校3年生SEコース生徒対象に、より効果的・効率的に学習するための学習方略ならびに自己調整学習方法について講義をおこなった。
8. 英語文化学科2年生 MFWI留学引率	2019年2月12日～2019年3月20日	英語文化学科2年生計181名が参加する米国ワシントン州Spokane 市 Mukogawa Fort Wright Institute での留学プログラムに5週間同行し、引率業務をおこなった。現地では、キャンパスで暮らす学生の留学生活全般を支援するとともに、TOEIC 受験に向けた学習指導や授業の補習、また、2年次以降の再留学に関するガイダンスをおこなった。
9. 附属高等学校2年生 出張講義	2021年1月	武庫川女子大学附属高等学校2年生を対象に、外国語学習における動機づけについての講義をおこなった。
職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 中学校教諭1種免許状	1990年3月31日	

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2. 高等学校教諭1種免許状	1990年3月31日	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. English Teaching Seminar	2016年・2017年	英文科主催の English Teaching Seminar を年度に1回ずつ企画・実施した。MFWI 講師を招聘し、地域の中学高校英語教員を対象に ESL 授業を公開。より良い英語教育について、日米の教員が議論する機会を提供した。
4 その他		
1. 論文の引用実績	2010年～現在	○ Sasaki (2015) "E-mail tandem language learning" が Sadeghi & Richards (2015), Munro (2016), Elboubekri (2017) など国際誌に引用。 ○ Sasaki & Takeuchi (2011) "EFL students' metalinguistic awareness in e-mail tandem" が Torsani (2016), Vazquez-Calvo (2016) など国際誌に引用。 ○ Sasaki & Takeuchi (2010) "EFL students' vocabulary learning in NS-NNS e-mail interactions: Do they learn new words by imitation" が Macaro et al (2012), Lin (2014) など国際誌への引用多数。
2. 学生委員	2016年4月1日～2017年3月31日	英文科学生委員として、毎週開催される幹事会の学生活動を指導・支援した。
3. Mukogawa Literature Review 査読委員	2017年	英文科紀要「Mukogawa Literature Review」の投稿論文を審査した。
4. 学校教育センター紀要編集委員長・査読委員	2017年4月1日～2020年3月31日	学校教育センター紀要編集委員長として同紀要第3～5号の発刊に参画した。また、査読委員として数本の研究論文ならびに実践報告を審査した。
5. 学校教育センター常任委員	2017年4月1日～2020年3月31日	学校教育センター常任委員として第6セクターを担当。広報と IR に関する業務に従事した。
6. 教職課程再課程認定ワーキング・グループ委員	2018年4月1日～2019年3月31日	平成31年度から始まる教職課程再課程認定に向け、各学部学科のカリキュラムの見直しに加え、英語関係科目のシラバスの執筆ならびに点検作業をおこなった。
7. 英文科教職支援委員会委員	2018年4月1日2021年3月31日	2018年度に英文科に発足した教職支援委員会の委員として、教員採用試験受験を目指す学生の受験指導をおこなった。また、英文科在学生対象の English Teaching Seminar を年度に1回ずつ企画・実施。英文科出身で現役の中高教諭を招き、模擬授業や講演を依頼。教職課程を履修する在校生に対し、教育現場の現状を知り、より良い英語教育について議論する機会を提供した。
8. 学校教育センター 教師教育研究部門 第3セクター研究員	2019年4月1日～現在	2019年度に新設された学校教育センター附置研究所の「教師教育研究部門第3セクター」研究員として、本学出身教員の研修制度のあり方について調査と研究をおこなっている。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. Noticing and awareness in learning English as a foreign language: Studies on Japanese junior high school students' e-mail communication	単	2013年8月	東京：金星堂	本著は、博士論文を修正しさらなる加筆をしたものである。日本人中学生に非同期型Computer-Mediated Communication 活動 (e-mail) を介した Focus on Form 活動や、e-mail tandem language learning 活動を施し、そこで得られた質的・量的データを分析した。考察と結論では、これらの CMC 活動が学習者の語彙文法学習やメタ言語意識発達に及ぼす効果を議論し、こういったコミュニケーション活動を積極的に取り入れることを提案している。(執筆言語：英語、122頁)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
activities.				
2 学位論文				
1. Make them focus on form: Incorporating e-mail-mediated learning activities into communication-based EFL classrooms in a Japanese junior high school context.	単	2012年9月	関西大学 大学院外国語教育学研究科 博士論文（英語、甲第460号、外博第11号）	本論文では、まず、日本の英語教育に定着しなかった Communicative Language Teachingの問題点をレビューし、それに代わるアプローチとして、Computer-Mediated Communication (CMC) を用いた学習活動を提案。その中でも非同期型CMC (e-mail) を介した Focus on Form 活動や、e-mail tandem language learning に注目。それらの活動を実践研究し、こうした CMC 活動が日本人中学生の語彙文法学習やメタ言語意識発達に及ぼす効果を検証し議論している。（執筆言語：英語、122頁）
3 学術論文				
1. A pilot study on back-channels in an English interview test: Their effect on a Japanese student's utterances and anxiety level. (査読付)	単	2006年11月	関西英語教育学会 紀要「英語教育研究」第29号、45-60.	本論文は、英語面接試験における面接官のあいづちの有無が日本人受験生の発話と不安度に与える影響を検証した研究を報告している。（執筆言語：英語、16頁）
2. EFL students' vocabulary learning in NS-NNS e-mail interactions: Do they learn new words by imitation? (査読付)	共	2010年1月	ReCALL, 22, 70-82. Cambridge: Cambridge University Press.	本論文は英語母語話者 (NS) と e-mail 活動をおこなう日本人中学生が、NS の e-mail text に含まれる英語語彙をどのように習得するかを社会文化理論の見地から検証した研究を報告している。（執筆言語：英語、13頁） 共著者：SASAKI, Akihiko (第一著者) & TAKEUCHI, Osamu
3. EFL students' metalinguistic awareness in e-mail tandem. (査読付)	共	2011年2月	WorldCALL: International perspectives on computer-assisted language learning (Chapter 4, pp. 55-69). NY: Routledge.	本論文は、e-mail tandem に従事した日本人中学生のメタ言語意識 (metalinguistic awareness: MLA) の発達について調べた研究を報告している。（執筆言語：英語、15頁） 共著者：SASAKI, Akihiko (第一著者) & TAKEUCHI, Osamu
4. Focus on form via computer-mediated communication: An alternative model to communicative language teaching in EFL contexts.	単	2012年3月	関西学院大学教職教育研究センター 紀要「教職教育研究」第17号、51-60.	本論文は、Communicative Language Teaching に代わる活動として Computer-Mediated Communication (CMC) を介した Focus on Form (FonF) をあげ、その有効性を論じている。（執筆言語：英語、10頁）
5. Focus on form in NS-NNS e-mail communication: Do young Japanese learners notice language	単	2013年3月	外国語教育メディア学会関西支部紀要「LET関西支部研究収録」第14号、23-39.	本論文は、英語母語話者 (NS) との e-mail communication 活動をおこなった日本人中学生の言語形式への気づきを Focus on Form の見地から検証した研究を報告している。（執筆言語：英語、17頁）

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
forms? (査読付) 6. E-mail tandem language learning. (査読付)	単	2015年2月	Language learning beyond the classroom (Chapter 12, pp. 115-125). NY: Routledge.	筆者が実践した e-mail tandem language learning を紹介し、この活動に参加した過去の生徒の学習体験を描写、その学習効果に言及している。なお、本論文は、教室の外で学習者が自律的に実施することができる様々な英語学習方法を集約する目的で編纂された Language Learning beyond the Classroom (D. Nunan & J. Richards) の一章として採用・出版された。(執筆言語：英語、11頁)
7. RULES vs. REALITY: On subject-verb number agreement.	単	2016年3月	関西学院大学教職教育研究センター紀要「教職教育研究」第21号, 75-83.	本論文は、「Each of 複数名詞」や「Neither A nor B」といった英語の数量詞が主語に用いられた際、英語母語話者が動詞の数や人称をどのように選択しているかを調査した結果を報告している。分析の結果、英語母語話者は必ずしも規範文法 (prescriptive grammar) に則らず、母語を感覚的に使用、つまり記述文法 (descriptive grammar) を適用する傾向もあることがわかった。この結果に基づき、本論文では、日本の英語教育においては規範文法に偏った教育ではなく、記述文法もバランスよく扱う必要性について論じている。(執筆言語：英語、9頁)
8. 中学生の英語言語形式への気づきを促す帯活動 “Buzz Talk” の実践 (査読付)	単	2018年2月	武庫川女子大学「学校教育センター年報」第3号, 155-164.	本論文は、日本人中学生の英語言語形式への気づきを促すコミュニケーション活動 “Buzz Talk” について、その開発とそれを支えた理論 (第二言語習得理論) を詳述し、またその実践の過程と結果を報告している。(執筆言語：日本語、10頁)
9. 教職課程履修者の教職回避に関する調査研究－英文科の学生を対象に－ (査読付)	単	2019年3月	武庫川女子大学「学校教育センター年報」第4号, 89-101.	本研究では、教職課程を履修する英文科学生の「教職回避」 (i. e., 課程履修中途辞退、教採不受験) の要因と方策について調査と検討をおこなった。分析の結果、学生は1～2年次と3～4年次にかけて教職への意欲が減退する傾向があり、その理由として教職課程の授業数の負担、教員採用試験に対する不安や教師になる不安が挙げられた。こうした結果を踏まえ、本研究は、学生の教職回避を防ぐ方策として教職への動機づけを高める授業実践や声かけといった授業担当教員の積極的介入を提案している。(執筆言語：日本語、13頁)
10. 中学生の英語明示的知識と習熟度の関係－中学校3年間の変化－ (査読付)	単	2020年3月	武庫川女子大学「学校教育センター紀要」第5号, 39-50. 東京：論説資料保存会 (要請を受け再収録)	本研究は、中学生の明示的文法知識と英語習熟度の関係を3年間に渡って調査した縦断的研究の報告である。明示的知識は独自に作成した文法性判断テストで測定し、英語習熟度はベネッセのGTEC for Studentsの点数を利用して調査した。分析の結果、両変数間の相関は学年が上がるにつれて高まる傾向が見られた。また、小学校の英語活動で身に着けた高い英語習熟度を中学校でも維持している生徒は、3年間通して明示的知識が豊富であった。これらの結果は、昨今の「コミュニケーション重視」の中学校英語教育においても、明示的文法知識が重要であることを示唆している。(執筆言語：日本語、12頁)
11. The third wind of language learning strategies research (査読付)		2022年4月	Language Teaching, 55(3), 417-421. Cambridge: Cambridge University Press.	e-Learning に従事する日本人大学生が用いる学習方略を「他者調整」「共調整」「自己調整」の観点で分析した研究。長らく「自己調整学習」の枠組みでとらえられてきた学習方略に「他者調整」や「共調整」の概念を加えることを示唆しており、学習方略研究における「第三の風 (The third wind)」を代表する研究として掲載された。
12. Study abroad from home: Development of L2 learner autonomy in an unprecedented online program during the COVID-19 pandemic (査読付)	共	2023年2月23日	Technology-enhanced language teaching and learning (Chapter 6, pp. 75-88). London: Bloomsbury Publishing.	本研究は、コロナ禍でおこなわれた「オンライン留学」の特徴について調査した報告である。得られたデータの質的分析の結果、オンライン留学は、学習者の自律性や主体性を向上させる要因を有しており、通常の留学に比して心身の負担や費用の負担が少ないことが明らかになった。この議論から、本論文では、コロナ後におけるオンライン留学の有効な利用方法を提案している。(執筆言語：英語) 共著者：SASAKI, Akihiko (第一著者) & TAKEUCHI, Osamu
13. Thinking converts	共	2023年3月	全国英語教育学会	本論文は、英語学習用の e-learning に従事する大学生の学習行動

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
intent into action : The role of metacognition in Japanese EFL university students' engagement in e-learning (査読付)		31日	紀要「Annual Review of English Language Education in Japan (ARELE)」第34号, 33-48.	を、動機づけ (motivation)、行動 (engagement)、メタ認知 (metacognition) の観点で調査した研究の報告である。分析の結果、英語学習に対する高い動機づけを実際の行動に移す学習者は、メタ認知知識が高度に発達していることが明らかになった。(執筆言語：英語) 共著者：SASAKI, Akihiko (第一著者) & TAKEUCHI, Osamu
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. 中高英語教員の仕事について	単	2010年12月～2013年12月	関西学院大学 国際学部 「ライフデザイン」講座	関西学院大学国際学部在籍し、将来、英語教職を目指す学生に向けた職業教育講義を4回(4年)に渡って行った。英語教員の仕事、職業の意味、そして、将来職業を通して社会に奉仕するため、学生時代に何をすべきかという内容。
2. 4技能統合を図ったリーディング教科書 A Good Read の concept と利用法	単	2018年8月17日	昭和女子大学	和訳や精読になりがちなリーディング授業に、著書 "A Good Read" シリーズ (松柏社, 2017, 2018) の4技能統合活動を導入する意義・必要性や、実際の活動例についてワークショップをおこなった。
3. 英語教育における ICT 利用—持続可能な利用に向けて—	単	2020年12月8日	兵庫県私立中学高等学校連合会英語教育研究会	GIGAスクール構想など、政府による初等中等教育の ICT整備が進む中、持続可能な ICT 利用の環境と教員の知識・技術及び心構えに関する内容。
4. DX 時代のタスクと教材 (Symposium: Tasks and Teaching /Learning Materials in the Era of Digital Transformation (DX))	共	2022年3月17日	第9回 JACET 英語教育セミナー (シンポジウム)	DX (Digital Transformation) 時代の英語教育における「タスク (言語活動)」や「学材 (教材を超えた学修者用マテリアル)」のあり方とその利用について、パネリストとして議論をおこなった。
5. ポストコロナ時代の ICT 英語教育を考える パンデミックがもたらした新しい形 (ICT-mediated English Education in the Post-COVID Era: What Have We Learned during the Pandemic?)	単	2022年3月17日	第9回 JACET 英語教育セミナー (招聘講演)	コロナ禍で得られた ICTに関する知見をコロナ後にどう活かせるかについて、授業、学材、留学の観点から議論する内容。
2. 学会発表				
1. Teaching strategy for description in English: Using popular Japanese 4-picture cartoon-strip.	共	1993年6月	英語授業研究会 関西支部例会 (大阪：梅田学園)	本発表では、中学3年生の英語授業に導入した4コマ漫画ナレーション活動の実践について報告した。この活動により、生徒の構文生成能力が高まることや、rephraseのstrategyが身に着くことが議論された。(発表言語：日本語) 共同発表者：佐々木顕彦 (第一発表者)、平岡一郎
2. 中学生の語彙学習を支援するCAIコースウェア「Vocabulary Lesson」の開発と実践について	単	1999年8月	第39回 (1999年度) 語学ラボラトリー学会 (LLA) 全国研究大会 (東京：早稲田大学) 発表要項集 pp.26-27	本発表では、発表者の勤務校の英語語彙授業に導入したCAIコースウェア「Vocabulary Lesson」の制作と、これを用いた授業実践を報告した。(発表言語：日本語)
3. Meeting the challenges of the practicum experience: Developing computer literacy	共	2003年4月	The 34th annual state conference at CATESOL (California TESOL)	本発表では、英語力の低い移民の adult learners が、computer を用いた autobiography 作成を通して English literacy と同時に computer literacy を高めることを目的とするシラバスとその実践事例が報告された。(発表言語：英語) 共同発表：SASAKI, Akihiko (第一発表者) & SPRINGER, Sarah

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
in a CBET publishing project.			2003 (Pasadena, CA, USA) Proceedings p. 49	
4. Autobiography publishing project design and implementation.	共	2004年4月	The 38th annual convention at TESOL 2004 (Long Beach, CA, USA) Proceedings p. 106	本発表では、英語力の低い移民の adult learners が集う ESL クラスにおいて実践した autobiography project のシラバスと学習者の学びを社会文化理論の観点から報告した。(発表言語：英語) 共同発表：SASAKI, Akihiko (第一発表者) & SPRINGER, Sarah
5. E-mail tandem language learning project: Students' awareness.	単	2005年8月	The 5th convention at FLEAT (Foreign Language Education And Technology) 2005 (Provo, UT, USA) Proceedings p. 28	本発表では、発表者が勤務校の選択講座 CALL で実施した e-mail tandem language learning 活動に参加した日本人中学生の学びと、日本語分析を通したメタ言語意識の高まりなどが報告された。(発表言語：英語)
6. CALL教室での語彙授業	単	2006年6月	外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部中学高校授業研究部会2006年度6月例会 (京都：キャンパスプラザ京都)	本発表では、中学2・3年生の英語語彙授業のために作成した授業シラバス、英熟語集、CAI コースウェアなどの教材を紹介した。(発表言語：日本語)
7. A pilot study on back-channels in an English interview test: Their effect on a Japanese student's utterances and anxiety level.	単	2006年8月	The 4th Asia TEFL international conference (Fukuoka, Japan) Proceedings p. 457	本発表は、英語面接試験における面接官のあいづちの有無が日本人受験生の発話と不安度に与える影響を検証した研究報告である。(発表言語：英語)
8. 語彙の授業に用いるデジタル・フラッシュカードに音声合成技術 (TTS) を取り込む試み	単	2006年8月	第46回 (2006年度) 外国語教育メディア学会 (LET) 全国研究大会 (京都：京都産業大学) 発表要項集 p. 95	本発表では、日本人中学生の視認語彙習得を促す目的で制作したデジタル・フラッシュカード (DF) に音声合成技術 (Text To Speech ; TTS) を取り入れた教材の紹介と、それをういた学習効果について報告された。(発表言語：日本語、ポスター発表)
9. 英語母語話者の e-mail text が日本人英語学習者の語彙学習に及ぼす足場 (scaffolding) 的役割	単	2007年8月	第47回 (2007年度) 外国語教育メディア学会 (LET) 全国研究大会 (愛知：名古屋学院大学) 発表論文集 pp. 154-157	本発表は、英語母語話者 (NS) と e-mail communication 活動を行う日本人中学生の語彙発達に焦点を当て、NSの e-mail text を足場としてそこに含まれる未習語が習得される過程を検証した研究報告である。(発表言語：日本語)
10. EFL students' language awareness in an e-mail tandem activity	共	2008年8月	The 3rd WorldCALL international conference (Fukuoka, Japan) Proceedings pp. 97-99	本発表は、e-mail tandem language learning をアメリカ人高校生と行った日本人中学生のメタ言語意識 (metalinguistic awareness) の発達を検証した研究報告である。(発表言語：英語) 共同発表：SASAKI, Akihiko (第一発表者) & TAKEUCHI, Osamu

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
11. 英語母語話者とのe-mail communicationにおける日本人英語学習者の気づき	単	2009年8月	第49回（2009年度）外国語教育メディア学会（LET）全国研究大会（兵庫：流通科学大学）発表要項集 pp.302-303	本発表は、英語母語話者との e-mail communicationを行った日本人中学生の言語形式への気づきを Focus on Formの観点から検証した研究報告である。（発表言語：日本語、ポスター発表）
12. 英語母語話者とのe-mail communicationにおける日本人英語学習者の言語形式への気づき（1）	単	2010年8月	第50回（2010年度）外国語教育メディア学会（LET）全国研究大会（神奈川：横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校）発表要項集 pp.194-195	本発表では、英語母語話者（NS）とのe-mail活動を行う日本人中学生の言語形式への気づきを促すために施した教師側の介入方法とその効果について報告した。（発表言語：日本語）
13. 英語母語話者とのe-mail communicationにおける日本人英語学習者の言語形式への気づき（2）	共	2013年8月	第53回（2013年度）外国語教育メディア学会（LET）全国研究大会（東京：文京学院大学）発表要項集 pp.36-37	本発表では、英語母語話者（NS）と日本人中学生の e-mail活動における教師側の介入を検証した研究を報告した。（発表言語：日本語） 共同発表：佐々木顕彦（第一発表者）・山田雄一郎
14. 中学1年生における多読の効果－ GTECリーディングスコアと語彙数変化の観点から－	共	2013年8月	第53回（2013年度）外国語教育メディア学会（LET）全国研究大会（東京：文京学院大学）発表要項集 pp.48-49	本発表では、日本人中学生に英語多読活動を1年間行い、その前後の読解力と語彙力の変化を調べた結果を報告した。（発表言語：日本語） 共同発表：山田雄一郎・佐々木顕彦（第二発表者）
15. 私立中学校英語教育－継続私立小学校出身者と公立小学校出身者が混在する教室での実践－	共	2015年5月	京都外国語大学主催「より良い英語教育を考える会」2015年度5月例会（京都：キャンパスプラザ京都）	本発表では、小学校で6年間毎日英語授業を受け、非常に高い英語力を持つ継続小学校出身者と、小学5・6年次に週1回程度の英語活動を経験した程度で英語学習はほぼ初心者である公立小学校出身者が混在する勤務校の英語授業の実態と、そこでの工夫について報告した。（発表言語：日本語） 共同発表：佐々木顕彦（第一発表者）、植松千奈美、塚本真理、山田雄一郎
16. 明示的文法知識と英語習熟度の関係について－中学1年生を対象として－	単	2015年8月	第41回（2015年度）全国英語教育学会熊本研究大会（熊本：熊本学園大学）発表予稿集 pp.432-433	本発表は、英語の成績が安定して良い中学生は英語の明示的知識、とりわけ統語や形態素の文法規則を熟知している傾向があるという筆者の経験に基づき、中学校英語学習における明示的統語形態的知識の重要性を量的に解明しようとした関心相関的研究の1年目の報告である。（発表言語：日本語、ポスター発表）
17. 明示的文法知識と英語習熟度の関係について－中学2年生を対象として－	単	2016年8月	第42回（2016年度）全国英語教育学会埼玉研究大会（埼玉県草加市：獨協大学）発表予稿集 pp.176-177	本発表は、英語の成績が安定して良い中学生は英語の明示的知識、とりわけ統語や形態素の文法規則を熟知している傾向があるという筆者の経験に基づき、中学校英語学習における明示的統語形態的知識の重要性を量的に解明しようとした関心相関的研究の2年目の報告である。筆者の仮説の通り、中学1年次から2年次にかけて、明示的知識と習熟度の相関が高まったことが報告された。（発表言語：日本語、ポスター発表）
18. 明示的文法知識と英語習熟度の関係について－中学3年間の変化－	単	2017年8月	第43回（2017年度）全国英語教育学会島根研究大会（松江：島根大学松江キャンパス）発表予稿集 pp.306-307	本発表は、中学校英語学習における明示的統語形態的知識の重要性を、ある学年をコホートに3年間縦断的に量的解明しようとした関心相関的研究の最終年度の報告である。筆者の仮説の通り、中学1年次から3年次にかけて、明示的知識と習熟度の相関が高まったことが報告された。（発表言語：日本語）
19. 4技能統合を図った教	共	2018年8月	第58回（2018年	著書 "A Good Read" シリーズ (Book 1-3, 松柏社, 2017, 2018) の

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
科書 A Good Readシリーズの開発			度) 外国語教育メディア学会 (LET) 全国研究大会 (大阪: 千里ライフサイエンスセンター) 発表要項集 p. 211	内容と教育的意義について発表した。本シリーズは、良質なリーディング素材を通じた読解方略と成句の習得を目指しながら、リーディング活動をスピーキングやライティング、プレゼンテーションといったアウトプットに活かすためのタスクを各章に加えた4技能統合型テキストである。発表では、新学習指導要領が目指す技能統合型の授業や評価に触れながら、本テキストの有効な利用方法について説明された。(発表言語: 日本語) 共同発表: 佐々木顕彦(第一発表者)、竹内 理、山岡浩一、森 有紀子
20. 日本人大学生のe-Learning学習行動と自己調整学習の関係	共	2019年08月	全国英語教育学会第45回(2019年度) 弘前研究大会 (青森県弘前市: 弘前大学文京町キャンパス) 発表予稿集 pp. 306-307	本研究は、リスニング用e-Learningに取り組む日本人大学1年生の学習行動と自己調整学習の関係を探索的に探ることを目的とした。分析の結果、学習回数とメタ認知方略の間に弱いながらも正の相関が見られた。この結果から、自らの学びに対してメタ認知的に関わる学生がe-Learningコンテンツを繰り返しかつ定期的に学習する可能性がうかがわれた。(発表言語: 日本語) 共同発表: 佐々木顕彦(第一発表者)、竹内 理
21. Japanese university students' strategy use in Mobile-Assisted Language Learning	共	2019年10月	3rd International Conference on Situating Strategy Use (Osaka, Japan)	本研究は、スマートフォンを利用したMALL (Mobile-Assisted Language Learning) 活動を通してリスニングスキル向上に成功した日本の大学生を対象に、彼らが使用した学習方略を調査した。分析の結果、リスニングスコアの伸びと学習回数、および学習回数に弱い相関が見られた。インタビューデータを分析したところ、リスニングスコアを向上させた学生は、学習回数を増やすためにメタ認知方略を使用していた。(発表言語: 英語) 共同発表: SASAKI, Akihiko (第一発表者) & TAKEUCHI, Osamu
22. The use of smartphone-based L2learning strategies: From other-regulation to self-regulation	共	2021年8月15日~20日	World Congress of Applied Linguistics [AILA2021] (Groningen, the Netherlands) ※ presented in an online format	本研究は、スマートフォンを利用した e-learning 活動を通してリスニングスキル向上に成功した日本の大学生を対象に、彼らの学習プロセスを自己調整学習の観点から調査した。分析の結果、学習者は自己調整学習方略だけでなく、デジタルツールやクラスメイト、教員の支援など、外的な要素も利用しながら学習を遂行していたことが判明した。これらから、本研究では、学習の成功要因と考えられる自己調整力と同時に他者調整の段階も必要であることを主張している。(発表言語: 英語) 共同発表: SASAKI, Akihiko (第一発表者) & TAKEUCHI, Osamu
23. 海外メディアの動画から深める4技能の統合的学習 レベル別教養英語コースブックの紹介	単	2022年8月	第61回(2022年度) 外国語教育メディア学会 (LET) 全国研究大会 (オンライン開催) 発表要項集 pp. 54-55	著書 "Integrity" シリーズ (Beginner, Intermediate, Advanced, 金星堂, 2023発刊) の内容と教育的意義について発表した。本シリーズは、イギリスの主要メディア The Guardian のニュース映像の視聴をきっかけに英語の4技能を統合的に高め、英語で情報を整理し発信する力を鍛える目的を持つテキストである。(発表言語: 日本語)
3. 総説				
4. 芸術(建築模型等含む)・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 雑誌記事: New Crownでの実践例② GET本文の指導 (Book 3 Lesson 5 GET Part 1)	単	2015年1月	「英語で授業」ここがポイント, pp. 8-9. 東京: 三省堂	「英語の授業は英語で」という学習指導要領の規定に対し、中学校英語教員が授業で英語を使う際の意義と注意点などを解説した。できるだけ具体的に述べるため、実際の授業の流れに沿って、教師の英語発話例や強調するポイントなどを詳説した。(執筆言語: 日本語、2頁)
2. 雑誌記事: アクティブ・ラーニングとしてのタンデム言語学習	単	2015年10月	Teaching English Now, Vol. 31, pp. 10-11. 東京: 三省堂	E-mail tandem language learning をアクティブ・ラーニングの観点から分析し解説。中学校英語教員対象に発行される雑誌のため、できるだけ実践に近い形で詳説した。(執筆言語: 日本語、2頁)
3. 雑誌記事: メディア利用と学習ストラテジー: 自律的学習支	単	2019年6月	「英語教育」2019年6月号, pp. 28-29. 東京: 大	ICTを利用した外国語学習における学習ストラテジー(方略)の特徴と、それらが学習者の自律的学習を促す可能性について論じた。例えば、単語学習ソフトを用いた学びでは、学習者はカード型学習や

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
4. 雑誌記事：気づきを引き出す文法指導	単	2022年9月	修館書店 Teaching English Now, Vol. 49, p. 4 東京：三省堂	分散学習といった認知・メタ認知ストラテジーを経験する。また、e-mailを用いた英語母語話者との会話活動では、Googleなどのオンライン・リソースを用いた英語表現検索方法を会得する。本稿では、こういった経験が、学習者のストラテジー利用に対する意識を高め、延いてはその後の自律的学習態度の発達に有益であると示唆している。（執筆言語：日本語、2頁） 中学校英語授業の文法指導で、生徒の言語形式への気づきを生起させることの重要性を理論的に解説。具体的な教授法として Oral Introduction の例を紹介した。（執筆言語：日本語、1頁）

6. 研究費の取得状況				
1. CALL/MALLによる英語学習成功者の学習者要因の特定とガイドンスモデルの構築	共	2018年4月1日～2024年3月	日本学術振興会 科学研究費 基盤研究C（一般）	本研究は、Computer-Assisted Language Learning（CALL）と Mobile-Assisted Language Learning（MALL）の有効性を、学習者要因の視点から比較・検証し、そこからCALL/ MALL を利用した外国語（英語）教育に貢献する具体的な学習方法に関する提言をおこなうことを目的とする。具体的には、動機づけやメタ認知、方略使用といった学習者要因に注目し、それらが学習形態（CALL あるいは MALL）の選択や、学習行動の現れとしての学習時間、そして英語習熟度や自律性の伸長に与える影響を検証する。それにより、CALL/MALL で英語学習を成功させる学習者要因を明らかにし、ICT を利用する英語学習者のためのガイドンス・モデルを構築する。（研究代表者）
2. e-Learning学習方略の分析と、方略使用を他者調整から自己調整に導く方略指導の構築	共	2023年4月～2026年3月	日本学術振興会 科学研究費 基盤研究C（一般）	日本人大学生がe-Learningを用いて英語学習を行う際に使用する学習方略を、自己調整と他者調整の連続体の視点を用いて分析し、②学習者をより自律的な学習方略使用者に導く指導法を提言することを目的とする。特に、教師による教育的介入が学習者の方略調整の内在化（他者調整から自己調整への変化）に与える影響を検証し、それをもとに、学習者をより自己調整的な方略使用者に導くための指導法を提案する。（研究代表者）

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 1995年4月～現在	<u>外国語教育メディア学会（LET）</u>
2. 2004年4月～2016年3月	<u>外国語教育メディア学会（LET）</u> 関西支部運営委員
3. 2005年12月～現在	<u>全国英語教育学会（JASELE）</u>
4. 2005年12月～現在	<u>関西英語教育学会（KELES）</u>
5. 2006年4月～現在	Asia TEFL
6. 2010年4月～2012年3月	<u>外国語教育メディア学会（LET）</u> 全国理事
7. 2014年4月～現在	<u>外国語教育メディア学会（LET）</u> 学会紀要「Language Education & Technology」査読委員
8. 2014年4月～2016年3月	<u>外国語教育メディア学会（LET）</u> 全国理事
9. 2014年4月～2017年3月	<u>外国語教育メディア学会（LET）</u> 学会紀要「Language Education & Technology」編集委員
10. 2014年4月～2019年3月	ベネッセコーポレーション「学力推移調査（習熟度テスト）」問題・解答原稿校正委員
11. 2016年4月～2020年3月	<u>関西英語教育学会（KELES）</u> 理事
12. 2018年4月～2022年3月	<u>関西英語教育学会（KELES）</u> 学会紀要「Studies in English Language Teaching（SELT）」編集委員・査読委員
13. 2018年7月～2020年1月	3rd International Conference on Situating Strategy Use（国際学会）運営委員
14. 2022年4月～現在	<u>関西英語教育学会（KELES）</u> 理事